

小特集・象徴天皇制の今を考える

今日の時代が突き付けている、現在の課題からテーマを見出し、これまで小特集を続けてきました。今回は「象徴天皇制の今を考える」というテーマです。その直接的な契機は、秋篠宮眞子さんと小室圭さんの結婚問題に端を発する、マスコミの大騒動にあります。そのレベルで取り上げるわけではありません。そこで露顕した皇族の問題は、日本の「象徴天皇制」とは何かということに行き着きます。それを考えるための参考としてとりあげたテキストは、君塚直隆『立憲君主制の現在 日本人は「象徴天皇」を維持できるか』（新潮社）、大澤真幸・木村草太共著『むずかしい天皇制』（晶文社）でした。いま、天皇制関係の著作は多数出ており、それをこの二冊に絞ることは無理かもしれませんが。しかし、わたしたちは、このテーマに触れる端緒として、とりあえず、この二冊を選びました。その上で、他の著作が選ばれても、参考図書なしで書いても、自由ということ。基本は憲法に規定されている象徴天皇制について考えたことを、四〇〇字七枚の範囲でまとめる、ということでした。

ファンタジーに生きる〈私たち〉の価値

晶文社）の中で大澤真幸が触れていた。それは〈必要条件〉とされる〈無知〉のことだ。

池上貴子

かねてより天皇制について考えていたことを、『むずかしい天皇制』（大澤真幸・木村草太共著、二〇二二年五月、

僕は若干恐れていることがあります。当事者がその本質について知らない限りで成功する制度が多いんです。ほとんどの制度がそうかもしれない。自分たちが考えていることと全然違うところに機能がある。制度の円滑な

働きが、当事者の無知を必要条件としている。当事者がからくりを知ってしまうと機能しなくなってしまう。天皇制はその種の制度である可能性がある。なぜいいのかわからないけれども捨てられない。でもその「なぜ」を知ってしまうと上手く機能しなくなってしまうかもしれない。

続けて、大澤は二十一世紀のグローバル資本主義の時代には、私たちは日本人のレベルを超えて人類の一員としてふるまい考えるよう求められるため、そのからくりを知る必要があるのではと提議する。つまり、ファンタジーに生きている天皇を含めた私たち日本人は、いつの段階でその幻想から目覚めるべきか、それとも腹を括ってファンタジーに生きるべきなのか。大澤はグローバル資本主義の時代と大上段に構えるが、世俗の議論からもその問いに答える時期が来ていることがわかる。

大きな転機となったのは、秋篠宮文仁親王の第一女子の婚約について、婚約者に金銭的な問題が発覚し、数年にわたってあらゆる情報媒体で皇族のスクランダルが取り上げられた事態だろう。

興味深いのは、これにより皇族の権威が失墜し、皇族解体へと言論が展開する、とはならず、沈静化していた「愛

子天皇」待望論が再燃し、勢いを増したことである。実際、共同通信の調査では、女性天皇を指示するという回答が二〇一九年は八二パーセントだったが、二〇二一年四月には八七パーセントにアップしている。これは女性活躍時代が来たからではなく、あくまで婚姻トラブルによって「世俗」の手（ケガレ）がついてしまった秋篠宮家を国民が嫌忌した結果だろう。何より今日の騒動の特徴は、思想の右左を越え、次期皇室の条件を国民が口出ししている点にある。多く寄せられた愛子天皇待望論の中でも典型的なコメントの一例を次に紹介する。

A家は小室問題に起因する、税金の流入疑惑や数十億に上る予算計上など皇室としての有り方に疑問が多すぎる／皇室に対する会計監査を実施したとしても、A家は国民からの信頼が地に落ちてしまった。／天皇、雅子さまは品格を保っている。このまま行けば愛子さまが時期天皇に最適でしょう。(二〇二一年十二月二十日、Yahoo ニュースコメント)

このコメントは国民生活に密接した「税金」や「会計監査」などの世俗的要素を忌避し、「品格」という曖昧な規範の頂点(理想)に自分たちの「象徴」を置こうとする典